



月刊「HANAYASURI」2024年3月号（通巻22号）

P2-3 巻頭エッセイ「和らぎだす頃」相地透

P9 「水をめぐる話し 第十一回」土山ふみ

P11 観察会②「アカガエルのたまごをさがす」相地透

P14-15「チェイン・オブ・ライフ」相地満

P18 日常エッセイ「おいしいみやげ話 14」長谷川芙実子

P4-8 「知多半島の四季をめぐる（春の花 篇）」相地透

P10 観察会①「第十七回西味鏡観察会」大西直美

P12-13「子どもが不思議と出会う時（二十二）」森下京子

P16 リレー連載「鳥を探して①」相地優子

P17 詩「春は確かに」相地満

P18-19 観察会のお知らせ [3～4月]

表紙／「ミモザ」青山映子 Eiko AOYAMA

巻頭エッセイ「和らぎだす頃」

2月20日。昨日、久しぶりに丸一日降っていた雨がやみ、朝から春のように暖かい。二十四節気で言うと、昨日は「雨水」。雨が降り、寒さが和らぎだす頃とされる時季である。パソコンに向かい、朝から調べものをする。今は、詩人で編集者でもあった異聖歌（本名：野村七蔵／1905～73）について考えている。

昨年12月、異聖歌が暮らした東京・日野市で開催された「特別展 童謡詩人異聖歌と児童文学に生きた、ひとすじの道」を観に行った。地元ゆかりの新選組を紹介する歴史館の一階と二階を使い、詳しく異聖歌の業績を知れる展示だったが、観覧者はわずかだった。

異聖歌は、童謡「たきび」の作者であり、新美南吉の作品を世に紹介した人物としても知られている。南吉は8つ年上の聖歌を兄のように慕っていたそうだ。一昨年来、南吉の詩と関わるにつれて、詩から想像される南吉像に寄り添うように、異聖歌の存在が浮き上がり、くつきりと輪郭を描き始めていた。

南吉は東京外国語学校に通うため、異聖歌を頼る。聖歌は南吉が学校に通いやすいように家を借り、一緒に暮らした。聖歌の結婚が決まると、南吉と一緒に住んでいた家を出るが、住まいが移った後も頻繁に出入りし、聖歌は妻である画家の野村千春とともに、南吉と家族のような付き合いを続けた。咯血した南吉を東京で看病したのも夫妻だった。

帰郷して数年後の1943年2月、病気が悪化した南吉は、作品を聖歌に託すため手紙を書く。慌てて半田に駆け付けた聖歌は、看病しながら、後の作品の扱いについて南吉の希望を聞く。3月22日、春が深まってきたころ、南吉は亡くなる。戦後になり、すでに勤めていた出版社・アルスから独立していた聖歌は、一人の編集者として南吉の作品を世に出すため奔走する。南吉文学を広めることは、聖歌にとって生涯にわたる仕事となった。

パソコンの電源を落として、数冊の本を借りるため、鶴舞公園にある中央図書館に行くことにした。図書館の駐車場に入ろうとしたが満車だったので、最近、整備された公園の外周を走り、北側の新しい駐車場に向かう。周辺の細い道路はなんだか混み合っている。すぐそ

ばを「にけつ」したバイクが騒々しく追い抜いていく。新しい駐車場もいっぱいだったので公会堂前の駐車場に入れると、理由が分かった。私立高校の卒業式だった。ブレザー姿の学生があちらこちらで談笑したり、写真を撮ったりしている。周りにはスーツ姿の先生と保護者の大人たち。制服を着ないといけないわけではないのか、それとも他校の学生なのか、私服姿の若者もたくさん集まっていた。

春、真っ盛りかのような気温。一緒に学生生活を送ってきた仲間と広い会場に集まって、楽しいのだろう。それぞれに晴れやかな表情をしている。その姿を見て、「そろそろ冬も終わりなのだな」と実感する。青い空の下、公園の中を歩いて図書館に向かうと、にぎやかな人混みのそばをアオスジアゲハが飛んでいった。

本を借りて家に帰ると、玄関前のカリンの木で「ツイーッ！」と鳥の声があった。ずいぶん近くで鳴くので見ると、シジュウカラのつがいだった。今年は鳥をしっかりと観察しようと思っていて、だんだん、すぐに見つけられるようになってきた。先月から今月にかけて、熱田では、ツグミ、カワセミ、数種のカモ、メジロ、ハクセキレイ、年中いるヒヨドリ、カラス、ドバトなどの鳥と出会っている。鳥たちが必死に食べるものを探している今は、もつとも鳥を近くに見られる季節かもしれない。

再びパソコンの前に座り、借りてきた一冊、「新版 せみを鳴かせて」（異聖歌作、こさかしげる絵／大日本図書、1990）のページをめくる。異聖歌が生前出版した詩集の中から選んだ詩が収録されている。詩人の観ていた四季の風景が、穏やかな言葉のつらなりで描かれる。自然の風景を描いていても、そこには、自然を見つめる人が存在している事が感じられた。きっと、大らかで人を包み込むような魅力があり、南吉もそんな聖歌を信頼していたのだろう。自然を見つめ文学を愛した二人に、想いを馳せる一日だった。

槇の葉っぱのかげにいる、／小鳥はなんの鳥でしょう。／うすいみどりのはねのいろ、／ももいろしてるほそい脚。／葉でもかけるか、つくるのか、／きのうもきていた槇のかげ。／小鳥がきている樹の向こう、／ちいさい虹がたちました。（「虹」）

（相地透）